

而上學的領域における眞理)への發展であると斷定されてゐることである。だがしかし、上述のいづれの個處も判斷の對象と直觀の對象とを區別し、從つて判斷のはたらしきをなす思考 (dianoia) と直觀する理智 (noesis) とを區別してゐる以上、「思考の中にない」といふことは直ちに「事物の中にある」ことを意味しない。一〇二七a二五—二九の文脈の絲は、普通の解釋の如く、判斷の上の眞偽は思考される事物の中にはなくてその思考の中にある。反之、純粹形相の認識の眞なることは、事物の中にはなく、思考の中にさへもなく、むしろ理智の直觀 (noesis dianoia) の中にあるとする方が素直ではなからうか。そしてここに「プラトンのイデアの觀想の最後の名残」を見る (Jaeger, *Artist* . 212) とする方が、アリストテレス認識論の發展の上から見ても自然ではあるまいかと思はれる。

後篇「アリストテレス認識論の研究」は、第一部において、失はれた對話篇『エウデモス』の斷片と『精神論』との間の「重復」のうちに「精神」の概念の變遷を敘述し、第二部においては、アリストテレス認識論をソクラテス・プラトン哲學から漸次に連續して發展したものとして理解しようとしてゐる。その詳細に立入ることにはできないけれども、いつたいシュテントエール、イエーガーの業績は、アリストテレスはプラトン哲學の完

全な理解から次第にその問題及びその解決を發展させたといふ假設の上に立つものである。これは十九世紀以來あらゆる方面に支配的な「發展」思想をアリストテレスの場合に適用したものである。しかしソクラテス哲學をプラトン對話篇のみならず同時代の人々の書き物から導き出すことによつて「ソクラテス問題」が深化してゐるやうに、プラトン研究においてもアリストテレスのみならず他のプラトン直接の弟子達の奉ずる師の説に關する諸探究は、新局面を出現しつつある。まことに各人とも師の説のただ一面のみを思ひ思ひに強調してゐるにすぎず、それらの聯關の中にこそまことのプラトン哲學は明確に浮び出るであらう。一般に、「歴史」に「發展」思想を導入する試みはすでにその限界に達してゐるのではないかと、多くの疑ひをもたざるを得ない。

大谷孝太都
坂根哲夫共著
河合俊三

近最 支那經濟要論

内田直作

昭和十年末「現代支那人精神構造の研究」の大著を完成され

大谷孝太郎氏はその後支那の經濟調査に轉ぜられて河合、坂根兩氏と協同の下に最近簡潔な「最近支那經濟要論」を公刊された。先に、現代支那人精神構造の統一的把握に雄大な構想を以て健筆を縱横に驅使された大谷氏が次いで支那經濟を如何に取扱はれたかを少からぬ關心を以て讀了した。次にその内容の簡単な紹介と二三の質疑を提出することとする。

著者は先づ第一章に於て支那經濟の本質的特徴を一應通説に從つて半封建性と半殖民地性を以て總括し、マルキシズム概念に於ける半封建性の失當を論じ、一方半殖民地性はこれを肯定する。その場合著者の失當とするところのマルキシズムの半封建性並にアジア的生産様式概念は専らヴァルガ説(ヴァルガ、世界經濟年報第三輯參照)に據られたやうである。尙同概念に對し他の諸家の幾多の異説あることは言ふを俟たない。次いで、かかる半封建性、半殖民地性を脱却せんとする支那民族主義の性格を反撥型、反撥民族主義として把握し、日本の躍進型と對立せしめる。即ち、支那が日本の如く純粹種族國家でないこと民族意識の高揚が不充分であつて日本の場合に於けるが如く英雄的要素の稀薄なこと、買辦階級の發達を許容した等の諸點に彼我の相違を見出す。

第二章に於ては固有の國內經濟機構として先づ農業を、次い

で國內經濟機構の工業化過程について何れも人口問題に關聯せしめつつ考察し、支那の人口都市集中は受動的な農村からの流民(Peasants)としての傾向多きことを説く。次に、國內工業化過程の發達はアメリカ大陸經濟の場合と同様に先づ國內市場への供給を第一義とし、國際市場への進出の將來性に對しては餘り期待をかけない。最後に、對外經濟機構としての貿易に關しては五港開港以前の傳統的貿易觀念から支那貿易の將來性に至るまでの歴史的觀察が輕快なテムボで試みられて居る。

第三章では、第一章に於て支那經濟の本質的特徴として把握された反撥民族主義の顯著な具體的事實、即ち今日支那經濟問題の焦點としての法幣問題の分析を進める。支那の反撥民族主義は積極的な武力的抗争よりもかかる受動的な經濟的闘争に於てより良く歴史的に鍛鍊されて居ることからして蓋しその至當なことを認めなければならない。本章に於ては法幣の發展過程につき幣制改革前の諸事情から昨年末に至るまでの経過が簡潔に要約されて居る。本章は全章中最も充實した部分であつて、飯島囀司氏の新刊「支那幣制史」と共に最近の中國幣制に關する勞作として推薦さるべきであらう。

最後の第四章では支那經濟の今一つの本質的特徴としての半殖民地性の歴史的具體的觀察が七時代區分されて試みられる。

最後の支那事變勃發後の列國の動向に關しては英、米、佛、獨、蘇の五ヶ國の經濟的活動について個別的に最近の情勢まで明かにされて居る。その場合、英國では支那外債の小口金利生活者の多いこと、米國の人道主義的傾向、佛國の地主的性格等各國投資の個性の描寫されて居るのは興味を盡さない。尙、本章の第一節に於て西班牙最初の支那渡來の年を一五一七年とされたのは何等かの誤りであつて、同年は葡萄牙が始めて正式にPêro Peres de Andrade を提督として、廣東に渡來した年である。(矢野仁一博士、支那近代外國關係研究參照) 西班牙の始めて支那に渡來した年は通説では一五七五年であつて、同年比律賓を経てオーギュスチン派の僧侶 PP. Fr. Martin de Rada と Jeronimo Martin が福建に根據地建設のため派遣されたのがその嚆矢とされて居る。(H. Cordier, Histoire Générale de la Chine III, p. 154, 參照)。世界の二大地理的發見後葡萄牙人は西方喜望峰を經由して西班牙人は東方マゼラン海峡から比律賓を經由して支那に始めて渡來した調期的年代として一應通説に従つてクロノジカルのことにはすぎないが訂正して置かう。

以上本書は三者の作成にかかるものであるけれども相互分擔部分間の論理的構造に矛盾がなく、著者が序文に於て共著とは

いへ高度に有機的な合作なりとした所以が肯ける。尙本書に於て首肯し得なかつた著者の抱懷せられる二つの主張について次に質疑を提出して見る。

1 資本主義精神の横溢

著者が第一章に於て半封建性を論ずる場合に、たとへ支那に資本主義的擴張再生産は實現しなかつたにせよ、古くから支那人には資本主義精神の發動を見、その横溢して居たことを主張し、史記貨殖列傳記載の事實を以て裏付される。その場合、著者の言ふ資本主義精神とは用捨なき目的合理主義である近代的資本主義精神とはその特性を異にするものではなからうか。

寧ろ、著者が他の箇所例へば第二章に於て説く多子的世界觀を生む同族主義、若しくは工業組織に於て人的本位なること、支那人使用人に對して人的待遇の非常に重要なこと、更にその勞作『現代支那人精神構造の研究』に於て

「同族登用又は因縁登用 (nepotism) が風をなす。經濟的方向の目的合理主義は此の爲に著しく鈍麻する。目的合理主義を精神とすべき株式會社企業は爲に成立たぬ。凡そ合理主義を要する大規模新式事業の經營は成立たぬ。因縁登用といふ自然歸向によりて制約された社會的方向を許容す

る。従つて其の限りに於て合理主義、目的合理主義の鈍麻せるものにして縋めて之等は成立つ。合夥が支配的な企業形態であり、有限股份公司は事實上常に同族會社か同郷人の會社である。勞働の供給、商ひの競争、就職の上に同血者又は同郷者が斥けられ、拔擢けされてはならぬ。朋輩同血者又は同郷者と相携へて行かねばならず、鋭い目的合理主義は其の限りに於て許されぬ。」（同書第七七九頁參照）

と明かにされて居る通り、支那人には資本主義精神とは相背馳するところの人的關係を尊重する倫理意識が横溢して居た側面を力説しなくてはならぬのではなからうか。著者の言ふ資本主義精神の横溢とは支那人の素朴の合理主義を指すのではなからうか。

ロ ギルド・ソーシアリズムへの發展

次に、質疑を呈したいのは著者が矢張り第一章に於て「ギルドの宗教的要素、及びフレンドリ・ソサエティーの要素は急速に薄れ、むしろギルド・ソーシアリズムのギルドに連なり、封建性から遠ざかる。」とギルドの宗教的、友誼的要素の急速な退行とギルド・ソーシアリズムへの發展を認められて居る點であ

る。この點支那人の傳統主義的特質に基いて過去に於ける長年のギルド生活に於て體得された風習が、その後その合理的存在の礎地の消滅して後も或る程度因襲的に保持されてゆく傾向が特に支那人に於ては有力に認め得られたのではなからうか。即ち、豫想された支那ギルドの宗教的、友誼的要素の退行はしかく急速ではなく、更にそれが純化されてギルド・ソーシアリズムのそれに連なるとするのは餘りにも樂觀的速断にすぎるのはなからうか。地域的に滿洲、北支、中支等一概に論じ得ないが、少くとも上海方面に於ては支那人の日常生活に於ける宗教的、友誼的方面の諸事項は新生活様式化したものも少なくないが、今尙可成りの程度因襲的にギルドを通じて圓滑に處理されてゆくやうに見かけられた。今後支那の政治的、社會的、經濟的諸構造の急激な變革と共にギルドのかかる傳統的諸要素が急速に退行瓦解し、ギルド・ソーシアリズムへの發展の時期が到來するかも知れないが、現在のところ中南支方面では尙その因襲的傾向は有力のやうに觀察され、更に支那のギルドが既にギルド・ソーシアリズムの段階にあるか否か乃至はそれへの發展が實現するか、若しくはその發展を見ることなくして崩壊し去るか等の諸點に關しても今後の検討に俟つべきであつて、慌しい事態の進展を見つつある今日容易にその一面的論斷をなし得ない

のではなからうか。敢て著者の御教示を仰ぐ次第である。

以上に提出した質疑の是非は兎も角として、著者が第一章に於て支那經濟の本質的特徴として把握された半封建性、半植民地性、反撥民族主義につきそれぞれの歴史的具體的主要事實をば以下第二、三、四章に於て展開せしめられる點論旨明快、且つ行文平易、重點は最近の諸事象の解説に置かれて居る。著者が支那經濟に對する一般の理解促進普及化に拂はれた懇切な努力は本書の價値をこの上なく高からしめて居ると稱し得られるであらう。(本文三三一頁、定價貳圓五拾錢、三省堂發行)

アンリ・セー

『佛蘭西經濟史』

Henri Sée: Histoire économique de la France,
Paris, Armand Colin, 1939.

根 岸 國 孝

一九三六年 Broditz の Handbuch der Wirtschaftsgeschichte にアンリ・セーの Französische Wirtschaftsgeschichte

書 評

の第二巻が上梓せられたが、その年著者は不歸の客となつた。我が經濟學界もこの碩學の死をいたんで、社會經濟史學第六巻第五號は彼の追憶に數頁を割いて居る。Sée の略歴、著書に就いて知らんとする人々は同誌を参照されたい。

Broditz 叢書の著者達が經濟史研究の權威であり、同叢書が世界經濟史研究に重要な地位を占めて居る事は論ずる迄もないが、就中 Sée の「佛蘭西經濟史」は經濟的事實の發生し、發展する環境と切離して經濟史を考へることの不可能を教へた名著として定評がある。彼の晩年の著書就中 Matérialisme historique et interprétation économique de l'histoire に於ては一層この立場を發展させ、唯物史觀の誤謬を一生を經濟史研究に捧げた學究の信念に基いて強調して居る。

この自國人の書いた自國の歴史を自國の言語によつて讀みたいと云ふ佛蘭西學界の希望は漸く最近に至つて滿されんとし、獨逸版第一巻に相當する部分が本書となつたのであるが、これを Broditz 叢書の佛蘭西語版と考へてはならない。否、Broditz 叢書の佛蘭西經濟史の方が Sée の著述の獨逸語譯であり、それが世界經濟史叢書として一定の計畫、體裁を必要とするが故に Sée の意圖に對し各種の制約を加へざるを得なかつた。その事は、この佛文「經濟史」中に獨逸版に含まれて居な